

[A年] 公現後第4主日(2021年1月31日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書30章18~21節**

- 18 それゆえ、主は恵みを与えようとして
あなたたちを待ち
それゆえ、主は憐れみを与えようとして
立ち上がられる。
まことに、主は正義の神。
なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。
- 19 まことに、シオンの民、エルサレムに住む者よ
もはや泣くことはない。
主はあなたの呼ぶ声に答えて
必ず恵みを与えられる。
主がそれを聞いて、直ちに答えてくださる。
- 20 わが主はあなたたちに
災いのパンと苦しみの水を与えられた。
あなたを導かれる方は
もはや隠れておられることなく
あなたの目は常に
あなたを導かれる方を見る。
- 21 あなたの耳は、背後から語られる言葉を聞く。
「これが行くべき道だ、ここを歩け
右に行け、左に行け」と。

【使徒書日課】**テモテへの手紙—4章(4~7) 7~16節**

- 4 というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。5神の言葉と祈りとによって聖なるものとされるのです。
- 6 これらのことを兄弟たちに教えるならば、あなたは、信仰の言葉とあなたが守ってきた善い教えの言葉とに養われて、キリスト・イエスの立派な奉仕者になります。7俗悪で愚にもつかない作り話は退けなさい。信心のために自分を鍛えなさい。
- 8 体の鍛練も多少は役に立ちますが、信心は、この世と来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となるからです。9この言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。10わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。11これらのことを命じ、教えなさい。12あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となしなさい。13わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。14あなたの内にある恵みの賜物を軽んじてはなりません。その賜物は、長老たちがあなたに手を置いたとき、預言によつ

て与えられたものです。15これらのことに努めなさい。そこから離れてはなりません。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。16自分自身と教えとに気を配りなさい。以上のことをしっかりと守りなさい。そうすれば、あなたは自分自身と、あなたの言葉を聞く人々を救うことになります。

【福音書日課】**マタイによる福音書5章(1~12) 17~20節**

- 1 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。2そこで、イエスは口を開き、教えられた。
- 3 「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 4 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
- 5 柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
- 6 義に飢え渇く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
- 7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
- 8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
- 9 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
- 10 義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 11 わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12喜ばなさい。大いに喜ばなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」
- 17 「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っ

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

イザヤ書30章18～21節

- 18 それゆえ、主はあなたがたを恵もうと待ち
あなたがたを憐れもうと立ち上がる。
主は公正の神であられる。
なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む者は。
- 19 シオンの民、エルサレムに住む者よ
あなたはもはや泣くことはない。
主はあなたの叫び声に応じて
必ずあなたに恵みを与えてくださる。
主がそれを聞かれると
直ちにあなたに答えられる。
- 20 主はあなたがたに
苦悩のパンと苦しみの水を与えられても
あなたの導き手はもはや隠れることがなく
あなたの目はあなたの導き手を見る。
- 21 あなたが右に行くときも、左に行くときも
あなたの耳は、背後から
「これが道だ、ここを歩け」と語る言葉を聞く

テモテへの手紙一4章(4～7) 7～16節

- 4神が造られたものはすべて良いものであり、感謝して受けるなら、捨てるべきものは何もありません。5神の言葉と執り成しの祈りとによって聖なるものとされるのです。
- 6これらのことをきょうだいたちに示す教なら、あなたは、信仰の言葉と、あなたが従ってきた良い教えの言葉とに養われて、キリスト・イエスの良い奉仕者となるでしょう。7俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。敬虔のために自分を鍛えなさい。8体の鍛練も多少は役に立ちますが、敬虔は、今と来るべき時の命を約束するので、すべてに有益だからです。9この言葉は真実であり、すべて受け入れるに値します。10私たちが労苦し、闘っているのは、すべての人、とりわけ信じる人々の救い主である生ける神に望みを置いているからです。
- 11これらのことを命じ、教えなさい。12あなたは、年が若いからといって、誰からも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、振る舞い、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。13私が行くまで、聖書の朗読と勤めと教えに専念しなさい。14あなたの内にある賜物を軽んじてはなりません。その賜物は、長老たちが手を置いたとき、預言を通してあなたに与えられたものです。15これらのことに努め、そこから離れないようにしな

さい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。16自分のことと教えとに気を配り、それをしっかりと守りなさい。そうすれば、あなたは自分自身と、あなたの言葉を聞く人々を救うことになります。

マタイによる福音書5章(1～12) 17～20節

- 1イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが御もとに來た。2そこで、イエスは口を開き、彼らに教えられた。
- 3「心の〔直訳→霊において〕貧しい人々は、
幸いである、
天の国はその人たちのものである。」
- 4 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
- 5 へりくだった〔別訳→柔和な〕人々は、
幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
- 6 義に飢え渴く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
- 7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
- 8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
- 9 平和を造る人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
- 10 義のために迫害された人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 11私のために、人々があなたがたを罵り、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いである。12喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

17「私が來たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。18よく言っておく。天地が消えうせ、すべてが実現するまでは、律法から一点一画も消えうせることはない。19だから、これらの最も小さな戒めを一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さな者と呼ばれる。しかし、これを守り、また、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。20言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・1月31日「公現後第4主日(降誕節第6主日)」の日課主題は「教えるキリスト」。「公現後(降誕節)」の終わり三主日(受難節前三主日)は、「教えるキリスト」、「いやすキリスト」、「奇跡を行うキリスト」の主題で福音書日課が設定されている。

・共観福音書の伝える主イエスの公生涯の活動については、一般に、「宣教(ケリュグマ)」、「教え(ディダケー)」、「病氣治癒(テェラペイア)」の三つにまとめられると説明される。しかし、それらをどのようなバランスで描くかは、福音書によって異なるものがある。「マタイ福音書」は、主イエスの宣教開始に続いてすぐに長大な「山上の説教」(5~7章)が置かれていたり、「律法と預言者」の解釈に強い関心を持っていることなどから、「教え」をなさる主イエスを特別に強調して描こうとしていると考えられる。「マルコ福音書」の関心の中心は、必ずしも明瞭ではないが、「病氣治癒」をなさる主イエスを強調する傾向がある。「ルカ福音書」の場合は、「宣教」される主イエスに関心の中心が置かれ、弟子たちもその「宣教」活動を継承する者たちとして描かれている。

・当日は、ゲスト説教者(坂上三男師)の指定する聖書箇所(ヨハネによる福音書 14:1~14、ヘブライ人への手紙 11:1~3)を聖書朗読とする。

旧約日課(イザヤ 30章より)

・「イザヤ書」は、ヘブライ語正典(旧約)中「後の預言者」の第一巻に位置づけられ、正典編纂において重要な役割を期待されたと考えられる預言書であり、紀元前8世紀の歴史上の「預言者イザヤ」の預言と活動を伝える(おそらく「預言者イザヤの書」等の伝承文書を元にした)前半部(~39章)と、「預言者イザヤ」の伝統を自覚的に継承し預言活動を重ねた預言者集団によってなされた預言の集成を元にした後半部(40章~)とに分けられる。一般に、前半部は「第一イザヤ」、後半部は「第二イザヤ」などと区別されるが、おそらく、「第二イザヤ」部分を生み出した預言者の伝統を継承する集団自身が「第一イザヤ」と「第二イザヤ」を一体の「イザヤ書」として編集し、正典編纂に際して「後の預言者」の第一巻に位置づけることによって、「預言書」を単に預言者個人に帰するのではなく、「預言を継承する伝統集団」に帰するものとして示そうとしたと推察される。

・日課箇所は、「第一イザヤ」の中に位置づけられる。「第一イザヤ」は、1:1で示されている「ユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世」の時代に沿って「預言者イザヤ」の預言とその活動が構成されていると見ることができるが、36章以下は様式が大きく異なるものとなっている。おそらくヒゼキヤ王の時代の預言者の物語を補足するために別資料を付加したことによる。すなわち、9章以下がすでに「ヒゼキヤ王の時代」

を背景にしているとみなす材料が十分にあるが、9~35章では、8章までのように預言者の活動を描く物語伝承がほとんど含まれないため、それを補うために36章以下が加えられていると考えられる。そこで、9~35章の解釈においては、36章以下で物語られているヒゼキヤ王の時代の出来事を参照しながら、各箇所背景となっている時期を推測することになる。

・日課箇所は、「サマリアの陥落」(28章)、「エルサレム攻城戦」(29章)、「エジプトとの同盟」(30章)を推察させる記述に続く箇所であり、ヒゼキヤ王がアッシリアへの朝貢服従を捨ててエジプトと組み、アッシリアに抵抗したのに対して、アッシリア王センナケリブが遠征しエルサレムを包圍しつつあった時代の背景の中で語られたイザヤの預言であると考えられる。36章以下(まったく同じ内容の文書が列王記下 18章以下に置かれている)の物語伝承の中では、アッシリア王の使者がヒゼキヤ王らユダの人びとに降伏を要求するのに対して、ヒゼキヤ王が預言者イザヤに主のことばを求めるという場面があり(37章)、そこにもイザヤの預言の言葉が伝えられている。

使徒書日課(1テモテ 4章より)

・「テモテへの手紙一」は、使徒パウロの「牧会書簡」の一つとして位置づけられてきた書簡で、パウロが自分の協力者として育て、宣教者として独り立ちさせた「テモテ」に対して、教会を牧するに際しての助言を与える内容となっている。近代聖書学では、この書簡をパウロ自身の手によらない、パウロの弟子たちの手による「パウロの名による書簡(第二パウロ書簡)」とみなす場合がある。それは、用語法やパウロの前提としている教会制度などが、他の書簡と比較した際に、パウロ存命中よりも後の状況を反映していると推認される部分があるからであるが、歴史的に古代教会以来、「パウロ書簡」の一つとして教会で読まれてきたことを踏まえれば、これを敢えてパウロ自身のものではない、パウロの弟子たちによる「第二パウロ書簡」とみなすことに特別な意義があるとは考えられない。

・日課箇所、パウロは、テモテに対して、テモテ自身の信仰の姿勢をしっかりと建て上げることを勧めている。パウロが一貫して考える宣教者としての姿勢は、自らが主に倣って生きるというものであり、「主から受けたもの」を自分自身のものとしてしっかり身に帯びた上で、続く者にも同じように「主から受けたもの」を渡し、主に倣う生き方へと導こう、というものである。そこで、パウロにとって、信仰における自己修練は、不可欠なものである。それは、もちろん「救い」に必要なものではないが、「伝道」には不可欠なものであり、それなくして「伝道」は不可能だと考えている。それは、根源的には、主イエスご自身が「十字架死」という受難を引き受けられたことによって、「神の福音の宣教」が弟子たちの中で実を結び始めた(伝道が結実した)という事実に基づいた理解なのである。

福音書日課(マタイ5章より)

・日課箇所は、「山上の説教」(5~7章)の冒頭部およびそれに続く「律法」に関する一般的教示として語られた教えの箇所。「山上の説教」は、宣教活動を開始され弟子たちを従わせられた主イエスのなされた「教え」の集成である。文脈上、主イエスがご自身に従ってくる群衆を見て山に登られた上でお語りになられた「教え」であることから、「山上の説教」と呼ばれてきた。これに並行する事柄をルカ福音書が伝えている箇所(ルカ6:17~49)は、山から降りて「平らなところにお立ちになって」語られたと設定されていることから、「平地の説教」と呼ばれることがある。「マタイ福音書」記者は、この「山上の説教」の場面設定を、「出エジプト記」19~24章に伝えられるモーセのシナイ山における律法授与の場面を下敷きにして構成していると見られ、そうすることによって、旧約正典の伝統に基づいた「律法の完成者」としての主イエスという神学的位置づけを示そうとしていると考えられる。

・3~10節で繰り返される「…人々は、幸いである(マカリオリ・ホイ…)」は、旧約(ヘブライ語)で「いかに幸いなことか(アシュレイ…)」という表現で多用される典礼的祝福表現に基づいている(詩編1:1、2:12、イザヤ30:18など40例)。この箇所は「八福の教え」と言い慣わされているが、「八つの幸福の条件」とか「幸福への八つの道」といった趣旨のものではない。八項の最初と最後(3節と8節)が「…人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」と並行表現になっている等、これは全体としてまとまりのある典礼的祝福であり、ある種の極限状態を取り上げながら、神の祝福の向けられる領域の広がりを目指している。そこで、八項のそれぞれについて個別に詳細に分析し、信仰生活指針として具体化するという聞き方は、必ずしも本来の趣旨にそぐわない。

・17節「律法と預言者」は、ユダヤ教正典の「諸書」を除く基本部分を指す。これは、一応、「創世記」から「申命記」までの「律法(モーセ五書)」と、「ヨシュア記」から「列王記」までと「イザヤ書」から「マラキ書」までの「預言者(前の預言者+後の預言者)」に分けられるが、新約において旧約が引用される際に、正確に出典元に基づいて「律法」あるいは「預言者」と区別されているわけではない。つまり、「律法と預言者」と言われた場合も、「律法」あるいは「預言者」と単独で言われた場合も、ほぼ同じ事柄を意味して用いられている。

・20節で「あなたがたの義」と「律法学者やファリサイ派の義」が比較されている。「義(ディカイオシュネー)」は10節、11節でも触れられており、6:1(善行)および6:33でも取り上げられるが、「マタイ福音書」の他例は、洗礼者ヨハネに関連する二か所(3:15、21:32)のみである。「マタイ」は、この語をパウロのように観念的の神学用語としてではなく、「善行」とも訳されるような具体的な「善き業」を指す用語として用いている。

来週の誕生日(1月31日~2月6日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-153番「幸いな人」は、16世紀ドイツの宗教改革第二世代にあたるルター派牧師ベッカーが、カルヴァン派のジュネーブ詩編歌に対抗して創作したドイツ語詩編歌の一つ。曲は「ベッカー詩編歌」のために17世紀ドイツの作曲家シュッツが新たに作曲したもの。
- ・21-57番「ガリラヤの風がおる丘で」(=III5番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。
- ・I-270番「信仰こそ旅路を」(=21-458)は、19世紀英国の会衆派教会牧師トーマス・リンチの歌集第2版(1856年)で発表された歌詞だが、現在はほとんど歌われていない。リンチの歌集は、当時の会衆派内で議論の的となった。曲は、スイス民謡として伝えられているもの。

21-153「幸いな人」**Wohl denen, die da wandeln**

1. Wohl denen, die da wandeln vor Gott in Heiligkeit, nach seinem Worte handeln und leben allezeit; die recht von Herzen suchen Gott und seine Zeugnis' halten, sind stets bei ihm in Gnad.
2. Von Herzensgrund ich spreche: dir sei Dank allezeit, weil du mich lehrst die Rechte deiner Gerechtigkeit. Die Gnad auch ferner mir gewäh; ich will dein Rechte halten, verlass mich nimmermehr.
3. Mein Herz hängt treu und feste an dem, was dein Wort lehrt. Herr, tu bei mir das Beste, sonst ich zuschanden werd. Wenn du mich leitest, treuer Gott, so kann ich richtig laufen den Weg deiner Gebot.
4. Dein Wort, Herr, nicht vergehet, es bleibet ewiglich, so weit der Himmel gehet, der stets bewegt sich; dein Wahrheit bleibt zu aller Zeit gleichwie der Grund der Erden, durch deine Hand bereit'.

I-270「信仰こそ旅路を」**My Faith, It Is An Oaken Staff**

1. My faith, it is an oaken staff, / the traveler's well-loved aid; / My faith, it is a song of trust, / sustains me undismayed. / I'll travel on and still be stirred / by silent thought or social word; / By all my perils undeterred, / a pilgrim unafraid.
2. My guide is Jesus Christ whose steps, / when travelers have trod, / Whether beneath was flinty rock / or yielding grassy sod, / They carried on, their joy unspent; / through pain and trial they onward went, / Unstayed by pleasures, still they bent / their zealous course to God.
3. My faith, it is an oaken staff, / O let me on it lean. / My faith provides the ground of hope, / supports a purpose keen. / Your Spirit, God, upon me send, / that I may be what you intend. / With patient courage, we'll contend / as radiant saints serene.